

英語初級学習者へのコミュニケーションアプローチ実践

大石 敏也^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【抄録】

言語学習におけるグループワークの有用性は学習者への発話練習の機会提供だけでなく英語コミュニケーションへの態度にも肯定的な効果がある一方、間違えを恐れない学習環境の増幅による文法への意識の離脱もあり、教員の介入は重要である。本稿では湘北短期大学の国際理解科目「ジェネラル・イングリッシュ」で実践した英語コミュニケーションのグループ活動を4つ報告し、特に初級学習者の対話への態度育成に有効なアクティビティのあり方を模索する。

【キーワード】

初級英語学習者、グループワーク、コミュニケーションアプローチ

1. はじめに

本稿で紹介するグループワークによる言語活動は湘北短期大学の国際理解教育科目である「General English」で取り扱ったものである。「General English」の到達目標は「職種・業種を問わず活用できる実践的英語運用能力向上と外国の文化・習慣などに対する理解力向上を目標とする。」と共通したものである。この目標の下、生活プロデュース学科では前後期それぞれ1単位を卒業要件とし、クラス編成はは全コースが混ざり合って構成されている。1クラス18名から22名の範囲で習熟度別である。筆者は初級レベルの学生を6年間指導してきた。履修学生のほとんどは

海外経験がなく、外国人との接触は日常生活にもないため、外国の文化風習を交え言葉や国外に興味関心を引き出すようカリキュラム作成を心がけてきた。英語学習にあまり積極的ではなく、2年間ほど英語学習からブランクあることも多い学生群でもある。また、湘北短期大学では週4、5日間、英語のネイティブスピーカーが常駐するイングリッシュラウンジが設置されており、「General English」の履修要件として、イングリッシュラウンジへ半期に3回以上参加することが義務づけられている。

上記のような目標設定、学内で気軽に英語を話す機会が提供されている中で、本稿では筆者が担当した学生たちに特に好評であったグループワークを4つ取り上げた。これらは授業参観やベテラン教員からいただいたアイデアを基にアレンジしたものである。

<連絡先>

大石 敏也 toshiya.oishi@gmail.com

2. グループワークのメリット・デメリット

グループによる言語活動は、学習者と教員に多くの効果をもたらす。試験のための学習から解放され、言語を学ぶこと、自由に会話できることで学習そのものを楽しむことが可能である。コミュニケーションアプローチを実践する Savignon (1997) はカリキュラム作成において活動の幅を広げるため構成要素の一つとして言語活動を挙げる。その中でもゲームはすべての年代の学習者たちが楽しんで交流することができ、文法・発音・語彙を練習する機会を提供することが可能である。クラス内のアクティビティはこれまでも一人ひとりの教員が努力し、それぞれの経験、独自の発想、指導理念に基づき創作され、カリキュラム作成においては欠かせないものになっている。

高等教育の言語教育の現場においてもグループワークがより積極的に活用されていることは想像に難くない。学生の実践的な外国語能力の習得を目指し、特にロールプレイングをはじめとするインタラクティブな活動は他の学習者とコミュニケーション活動を必然とする。クラス内で行われる教員-生徒による会話分析などグループ活動内の学習者の談話能力について詳しくまとめた Ellis (2012) は、Long et al が 1976 年に行った学生間のグループワークと教員主導のワークにおける学習者の発話量の比較調査を引用し、学生間グループワークの方が多くの学習者の発言機会を与え、ディスカッションの創出、曖昧さを解消するための質問、会話の遮断、会話の主導権への争い、冗談などへの多様な発言があったと報告している。また、Long と Porter はグループワークの主要な効果として、1. 発話機会の提供、2. 発話の質向上、3. 個人指導への補助、4. 肯定的な雰囲気醸成、5. 学習者の意欲向上、を挙げている。Savignon (1997) は潜在的な情緒や感情など外国語習得における情意要因について Hymes (1971) のアイデンティ

ティと動機付けに関する要約を引用し、外国語習得には対象言語への接触量よりも学習態度がより重要であることを指摘しており、コミュニケーション態度の醸成とグループワークあるいはクラスへの参加度には密接な関係があると言える。例えば、文法の誤りや発音の正確性が欠けるためにクラス内で発言することへの恐れを感じる英語初級者が集まる外国語教育の場面においては、失敗への不安がない環境作りを学期開始時やシラバスによって学生へ周知すること、あるいは学生と事前に約束することはクラス進行において重要である。

しかし、グループワークは有益なものばかりではなく、同時に多くの制限があることも Ellis (2002) はまとめている。その中で Williams (1999) が指摘しているのは、初級者～中級者間のタスク中の会話において、学習者の文法に対する意識が低く、教員の介入があつて誤りが意識されるという点である。間違えを恐れられない環境が進みすぎるあまり、文法を適切に運用して話す意識が極端に低下、あるいは無くなってしまうことが習得の妨げになっている点については、どれだけアクティビティに教員が介入し、習得すべき文法能力をアクティビティで実践させるかが重要であることを意味する。

一つの授業で学習すべき文法・単語・発音など評価することは到達度評価（単語・文法問題）で確認できるが、Savignon (1997) は、第2言語の習得の目標が実際場面での言語の運用であるならば、言語学習において測るべきものはコミュニケーション能力であり、学生の評価は実際の場面で能力を発揮できる性質を反映すべきであると述べている。また、Bong (2020) は初級レベルの学習者は暗記学習になりがちであるが、教室外での実際の会話においてはどのように予想外かつ不完全な理解の中でどのような返答をするかとい

うことに対応できないと述べている。科目における達成度を測ることももちろんであるが、実際にどのように言葉が使われているかを学ぶことも必要であり、「General English」においても実践的英語運用能力向上を目指していることからグループワークにより習熟度を評価することも重要である。

授業の構成要素の一つである言語活動は、学習者中心とすることで集中力と授業運営に多大なエネルギーを常に必要とする。主観ではあるが、6年間担当した「General English」では、友人同士で話すことにより間違えることへの不安が軽減し、発話に対するハードルが意識が変化していることは同時に観察できた。今後は学習環境が与える影響とアクティビティの学習成果の影響を分析が求められる。

3. グループアクティビティ

Line up

クラス内の会話を活性化させるアイデアを実行するためには、参加者の心理的ハードルを取り除く必要がある。例えば、初回の授業で初めて顔を合わせる学生同士では緊張や不安がつきまとうものである。このアクティビティはそのような緊張をほぐすための Warm-up や自分自身について相手に伝える機会にもなり得る。自分の誕生日、名前のアルファベット、持っているペンの数などの序列化できる情報で1列に並ぶアクティビティである。フォーカスすべき点は相手に情報を伝える、聞く活動であり、コミュニケーションは意味のある個人的な情報を伝えるものであるため、文法の正確性は即時に求めない。授業の開始に行う場合には学生同士の信頼関係構築や全員がスピーキングの練習に参加することを意識し、習得すべき文法・単語の復習・アセスメントとしても授業内で使用できるアクティビティである。

手順

1. 初回の授業、又は授業開始時に、英語のみでコミュニケーションして指示された順序通り1列に並ぶゲームであると口頭または英文で指示する。
2. 並ぶ基準としては、誕生日、名前のアルファベット、持っているペンの数、その日に起きた時間、寝た時間、身長、海外に行った回数などを用い、学生同士で英語で質問し合う。
3. 参加が進まない場合は学生をひとり選ぶか、教員が基準点として列に参加し参加を促す。
4. 整列することができたら、教員または学生同士で正しい順序で並んでいるか確認をする。

オプション

中上級者向けには、英語による計算問題の出題など個人のアクティビティの複雑さを増すことで、列を作ることも可能である。言葉を一切使わないようにし、ボディーランゲージを使うアクティビティとしても活用できる。

One Two Three Listening

初めて聞く内容や、既習の単語数が少ない学習者にとって、話の概要をリスニングのみで理解することは簡単ではない。実際のコミュニケーションでは、なじみのない話題に直面した際や返答に困った質問を受けた時などの対応能力は、文法や語彙の以外にも必要なコミュニケーション能力である。このアクティビティでは、あるまじりリスニングを3度聞くことができ、1回目、2回目3回目にそれぞれ理解した又は聞こえた内容を書き取るものであるが、グループやペアで理解した内容を1回目、2回目に確認し合う、3回目を聞く前に推測するなどして理解の促進に役立てることが可能である。実際の会話ではリスニングは

1度きりではなく、聞き返したりして2度、3度聞くことは可能であるため、学習者の緊張を減らし会話全体を理解することに役立つ。また、聞き返すフレーズの習得やリスニング内容の要約し、伝えることでスピーキングの練習機会やサマリー作成の練習をすることができる。

手順

1. ペアになるか4名以内のグループになり、One Two Three コラム (Appendix に掲載) のハンドアウトを配布する。リスニングする内容は教科書や短いニュースなど3回聞くことを考慮した長さを選択する。
2. 1回目に聞こえた内容、単語は1の欄に、2回目には2の欄に、3回目には3の欄に記入するよう説明する。新出の単語や文法などがある場合は、学習者レベルに応じて事前に導入する。
3. リスニングの2回目に、ペアまたはグループ間で何を聞き取ることが出来たかを確認する。また、3回目に向けて全体がどのような内容になっているか推測し、グループ間で共有する。
4. 3回目のリスニング終了後、ペアまたはグループで内容をまとめクラスに発表する。

オプション

中上級者には2回目後の共有するアクティビティの際に英語で内容を確認し合ったり、3回目終了後にサマリー発表をペア、またはクラスへ英語で行うアクティビティも可能。また、3度目は話者の気持ちや感情を読み取るなど、リスニングのコンテキストから個人の経験、他のコンテキストへ関連付けて、論理的な文章理解やライティングへ移行させることもできる。(Zygouris-Coe, V., & Glass, C., 2004)

Telephone Rumor

伝言ゲームはグループ内で、あるメッセージを順に伝えて、最後までどの程度正確に伝わるかどうかを確かめるゲームである。言語習得の場においては古くから楽しまれているものである。伝言ゲームは耳元で小さくささやき、音声で伝えなければならないので発音やイントネーションを指導に活用できる。単語、フレーズ、センテンスの順に難易度が上がるが、アカデミックトピックでも応用が可能である。ゲームとしては最初のメッセージと最後に伝達されたメッセージが大きく異なるほど面白いが、例えば電話での会話のように聞き返すフレーズを含めると自然なコミュニケーションに近づくことができる。

手順

1. 6、7人ほどのグループに分かれ、ホワイトボードを背にして1列に並び、伝言が他に聞こえない程度に間隔を空ける。
2. はじめに教員が先頭の学生に対し口頭でメッセージを伝え、各グループ内で順にメッセージをささやいて伝える。聞き取ることが出来ない場合は、英語で聞き返すフレーズを使ったり、スベルをチェックしたりし、確認が出来るようにする。
3. 最後の人々がメッセージを受け取ったら、ホワイトボードに書き正解が一番近い意味となったグループが勝ちとする。

Photo of People

暗記ばかりの学習では、実際のコミュニケーションでの臨機応変な対応をすることは難しい。このアクティビティは与えられた人物の写真からその人物を想像して自己紹介文を作成するものである。写真や絵から情報を読み取り、写っている、あるいは描かれていることについてわかりやすく相手に伝えることは、論理的な思考力が求められるが、会話の応答が教科書の型どおりではなく、

コミュニケーションの創造を広げるための余地を十分残しておくは自由なコミュニケーションを行う上で重要である。

手順

1. 学生から教員へ教員自身についての5W1Hを使った質問を受け付け、黒板へ質問と回答をまとめる。例えば、What is your name? Where are you from? When is your birthday? What is your favorite movie/music? Why do you like it? How old are you? How many brothers/sisters do you have?などを質問させる。
2. 教員の回答を自己紹介として情報を整理し、クラスへ発表する。自己紹介で伝えるべき内容を整理する。
3. 個別アクティビティで自己紹介を考える時間を与え、クラスサイズが小さければ全体で発表、クラスサイズが大きければペア、又はグループで発表する。
4. インターネットなどで集めた人物画像を全員に配布し、その人物についての自己紹介文を作成する。
5. クラス全体、ペア、グループでその人物について自己紹介文を発表する。

オプション

想像の自己紹介と写真とのギャップを楽しんだりすることができるアクティビティであるが、名前や出身地から欧米系名前の由来を地理的・文化的にアプローチすることで、学習者との対話を継続できる。また、想像した自己紹介文について、写真・画像から読み取れる理由・根拠を付け加えることで、論理的な文章作成へ発展させることも可能である。

4. 終わりに

非常勤講師を担当するに当たり、また学習者すべてに授業参加を促す取り組みを行うために、初回の授業説明での到達目標の共有や、コミュニケーションな活動を促す着席の配置などをはじめとする環境作りから試行錯誤を繰り返してきた。グループワークによるアクティビティは学習者にとっての楽しみながらパフォーマンスできる機会を提供するだけではなく、学んだ内容が十分反映されているアクティビティであれば評価の性質も持ち合わせている。しかし、アクティビティや学習内容が同じでも、教員は学習者の言語レベル、学習に対する態度やモチベーションを観察し、共有されたアクティビティを調整、又はひと味付け加えたり差し引いたりして、指導する学習者に合わせて実施するものである。調整は地域や文化、第一言語などの外的要因から、学習への態度などの内的要因があるが、学習者が何を理解して何を理解していないかを教員は常に把握していなければ、十分にパフォーマンスの機会を提供できない。英語初級者へのゲーム導入においては、クラスの環境や構成を十分に把握し、どのくらいのフィードバックができるかにより教育の質の向上が見込まれる。ゲームやロールプレイングによる言語活動が学習者にとっては単に楽しかっただけで終わるだけでなく、実際のコミュニケーションを創出し、授業の進行を管理する重要なパフォーマンスを測る機会にもなっている。

初級レベルの学習者にとって英語で会話することに対し受け身となり、文法や語彙を駆使し意味を交渉するレベルでの会話をすることは大変難しいことであるが、コミュニケーションアプローチを実践することで、これまでの英語対日本語の暗記学習からの脱却をサポートしていると考えている。課題としては、意味のやりとりを中心とすることで、英語はブローケンでもよいという

認識や、正しい文法表現への意識低下につながることもある。だが、社会に出てからの実践の場では文法の正確性よりも相手が伝えたい内容を読み取る会話アプローチが最優先されるのではないだろうか。正確に意味を読み取るためにも文法や語彙の理解はもちろん継続して学ぶ必要はあるが、コミュニケーションの態度を養うため、どのように授業内でバランスをとるのが必要である。

参考文献

- Bong, D. (2020). Proficiency vs. Performance vs. Achievement [blog post]. Retrieved from <https://sealofbilitery.org/blog/proficiency-vs-performance-vs-achievement/>
- Ellis, R. (2012). Language teaching research and language pedagogy. Chichester, West Sussex: Wiley-Blackwell.
- Savignon, S. J. (1997). Communicative competence: Theory and classroom practice, 2nd ed. New York: McGraw-Hill.
- Zygouris-Coe, V., & Glass, C. (2004). Making connections: Text to self, text to text, text to world. Retrieved from <https://sites.google.com/a/alaska.edu/dianekardash/Home/making-connections>

Appendix



One Write any words, topic or gist you heard during the first listening	Two Write the additional thing you heard during the second listening	Three Write the additional thing you heard during the third listening

Communicative Approach for Beginner English Language Learners

Toshiya OISHI

【abstract】

Group activities in English language classrooms not only provide learners with opportunities to practice communicating in English, but also have positive effects on their attitudes toward English communication. At the same time, there is a lack of attention to proper use of grammar due to a classroom environment acceptable of making mistakes. Therefore, the teacher's role of being a facilitator is essential. In this paper, the author reports four English communication group activities practiced in English language courses labeled "General English" at Shohoku College, Japan, and explores classroom language activities that are particularly effective in fostering positive attitudes toward English communication in beginner learners.

【key words】

English for beginners, group activities, communicative approaches